

# 心のつながりを大切に

前原 由紀

園外保育に行つたときのことである。H男が袋を片手に無心にてんとうむしを採つていたので、私はとなりで一緒に虫取りをしようと思い、近づいていった。すると「てんとうむしは何を食べるの？」と聞かれたので「アブラムシという小さな虫を食べるんだよ」と答えた。「一緒に探しにいった」と頼まれたのでついていったが、なかなかアブラムシが見つからない。H男としばらくうろうろしてしまった。ふと一緒にいたD男が「てんとうむしがいるところにいるんじゃないの？」ともつともなことを言った。H男と私は「そうか！」と一緒に顔を見合わせて笑つてしまい、結局もとの場所のすぐ近くでアブラムシを

見つけた。保育者としてすぐにアブラムシを見つけあげられなかった情けなさと同時に、アブラムシを探しながらいろいろな虫の話、虫好きであるH男の兄と虫嫌いである母親の話、夏休みに虫取りにつれていってもらう話などをして、H男と心がつながっていくようなうれしい気もして複雑な気持ちになった。

アブラムシのついた枝葉を見つけると、H男はそのまま袋の中に入れ、てんとうむしの動きをじっとみつめた。袋を目線までもちあげ、目をこらして見ている。すると突然、H男は何を思ったか、袋の中のでんとうむしをあわてて出し始めた。必死に袋をふつててんとうむしを出している。H男はてんとうむしがアブラムシを食べようとしているところを見たのであろう。私は思わず「どうして出しちゃうの？」と声をかけそうになったがやめた。はじめ、H男にとってのアブラムシは、「てんとうむしのエサにするためのアブラムシ」だった。ところが、アブラムシとかかわっているうちに「食べられてしまうアブラムシ」という思いに感情が変化していったのである。ここが子どもと大人の考える道筋の違いである。大人は「エサであるアブラムシ」という到達点が先に見えているので、そこから抜け出すことはなかなかできない。しかし、子どもは行動しながら心を動かし、さまざまな道筋で物事を考えていくので、感情や考え方が変化していくのである。この瞬間、H男は、保育者や友達と一緒に探したアブラムシをいとおしく感じていたのだろうか？ それともてんとうむしよりアブラムシのおもしろさに興味をもったのだろうか？ その真意

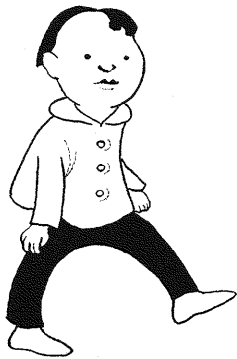
はわからないが、結局、てんとうむしは全部逃がして、アブラムシを大切そうに園まで持ち帰ってきたのである。

私の中には「アブラムシよりてんとうむしの方がいい」という感覚があった。そしてH男が袋からてんとうむしを出しているのを見たとき、「せっかくなつかまえたのに……」と思った。でも、それは私の勝手な解釈であり、H男の物事の考え方や気持ちをまったく無視したものである。そのことをとっさに感じて言葉をかけるのをやめた。もし、「先生や友達と一緒に探したアブラムシが食べられてしまう！」と思っててんとうむしを袋から出していたとすれば、「どうして出しちゃうの？」という一言がH男と私の心のつながりを断ち切ることにもなりかねない。よく考えてみればてんとうむしもアブラムシも同じ虫でありどちらが好きでもかまわないのである。「アブラムシは害虫である」というのは大人の感覚で、H男からすればこのときアブラムシは世界一いとおしい虫だったに違いない。

幼稚園で子どもたちと接していると子どもたちの柔軟な心と豊かな感性には驚かされてばかりである。それと同時に大人の窮屈な感覚を本当につまらなく思う。そうはいっても大人として常識ある行動をとるためにはそうならざるを得ないこともある。庭を整備しようとするればやはり害虫は排除するものだと認識し、そこにそれぞれの人の価値観がうまれ

てくる。まだこの価値観がぼんやりしている幼児期だからこそ、幼児にはあらゆるものに対して未知なる思いをいただき、何の先入観もなく柔軟にかかわっていける力とエネルギーが備わっているのだ。幼児が「育っていく」ことを喜びながらも、ある意味「育っていく」ということは型にはまってしまうことなのかもしれないと思うこともある。そのような矛盾を感じながらも、この時期だからこそその豊かな感性を大事に思い、寄り添っていくことが大切なことであり、そこに子どもとの本当の心のつながりができていくのではないかと思っている。大人とは違った子どもならではの考える道筋を理解し、そこに感動しなければ、心は通い合えないのである。

そうは思っているにも実際に保育をしてみるとなかなかうまくいかないものである。例えば、子どもたちがごっこ遊びを始めると、大人は入れない世界を築かれてしまう。そうすると保育者として何かした方がいいのではないかという焦りがつい「何になっているつもりなの?」「何をしてるの?」などと声をかけてしまうことになる。このような保育者の安易な投げかけは、時には子どもたちの柔軟なかかわりを限定してしまうことにもなり、豊かな感性の芽をつみ、保育者自ら子どもたちとの心のつながりを薄くしてはいないだろうか。



もう昨年になるが、私にも苦い経験がある。木片とリールを組み合わせて四、五人の子どもたちが何やらつくっていたが、通りがかりに私がかけた「潜水艦みいだね」という余計な一言でその子どもたちのイメージが「潜水艦」になってそこで遊びが終息してしまったのである。それまでは、そこにいる子どもたちが「海賊船」や「いかだ」などというなことを言いながら、木片をつけ足していつて遊びが展開されていた。木片をつけ足しながら、そこにイメージをわかし、気の合う仲間同士で最後は何にしようか折り合いをつけようとしていたのだろう。本当ならそのことに丁寧につきあうべきではないか。どうしてそのようなことを言ってしまったのかと声をかけてから後悔したが、そのまま遊びはおわってしまった。黙って見守っていたらどれほど楽しい世界が展開していったかと思つたのだろうか。まれてならない。「潜水艦」と言った保育者のことを子どもたちはどう思つただろうか。遊びが終息したとき「先生はほくたちの心の中がぜんぜんわかつてないね。つまんなくなつちやつたじゃない」と言われているような気がして心が痛んだ。このとき、子どもたちの遊びに入れてもらつたり言葉をかけたりして、子どもたちの心にせまっていくことがどれほどデリケートなものか痛感したのである。

子どもたちの心にせまるとき、その子の性格や置かれている状況、興味のあること、仲間関係などが瞬時に頭の中を駆けめぐり、保育者としてどうという言葉をかけようか、どう

いうふるまいをしようか迷う。とにかく瞬時の判断なので、子どもの心にピッタリ寄り添えることなどなかなかないのかもしれない。しかし、そのことを素直に反省し、二度と子どもの心に土足でズカズカと入り込むようなことがないように考えられる保育者でいたいものである。

毎朝「先生、み〜つけた!」と言いながら登園してくる子がいる。目と目を合わせて「うわ!びっくりした! みつかっちゃった!」と言うと、にや〜と笑い遊びに出かけていく。「先生、今日も元気に来たよ!」の合図である。もし、今、「朝はおはようございましてと元気にあいさつをするのよ」とこの子に言ってしまったら私とこの子の心のつながりは薄くなるだろう。なぜなら、朝の「み〜つけた!」はこの子と私にとってかけがえのないあいさつであり、お互いの心を確かめ合う瞬間だからである。そしてまた遊びが途切れただふとした合間に「先生、み〜つけた」と言いながらひざの上にちよこんと座ってくる。朝の「み〜つけた!」とは少し勢いが違っている。次の遊びにいく充電をしているのである。その証拠にひざの上のりながらも、視線は周囲の環境をなめまわすように見ているのである。また、悲しい思いをしたときも「み〜つけた!」と言いながらそばに来る。一度「どうしたの?」と声をかけてしまったことがあるが、そのときは、悲しそうな表情をして自分のロッカーに入ってしまった。心の整理がつくまで、ただ黙って寄り添ってほし

かっただのだろう。

子どもたちにとって、保育者と心が通い合うということは、いきいきと生活をおくっていく上ですべてのベースであり、活動していくエネルギーのもとになると思う。しかし、それはそう簡単なことではない。ひとりひとりと心が通い合うということは、ただ子どもの言いなりになってやさしくすることはばかりではないからだ。子どもは、時にビシッと大人の判断を保育者に求めていることもある。自分のやりたいことを実現するためのヒントがほしいこともある。ただ黙ってそばにいてほしいこともある。大切なのは、ひとりひとりが何を要求しているのかを考え、丁寧にかかわり、その子の豊かな感性を大事にしていくことである。そして、ひとりひとりと丁寧にかかわり、心と心が通い合ったと感じるとき、そこには保育者と子どもという関係を越えた人間と人間のつながりを感じて、ほんわかとしたあたたかい気持ちになれるのである。

(宇都宮大学教育学部附属幼稚園)